

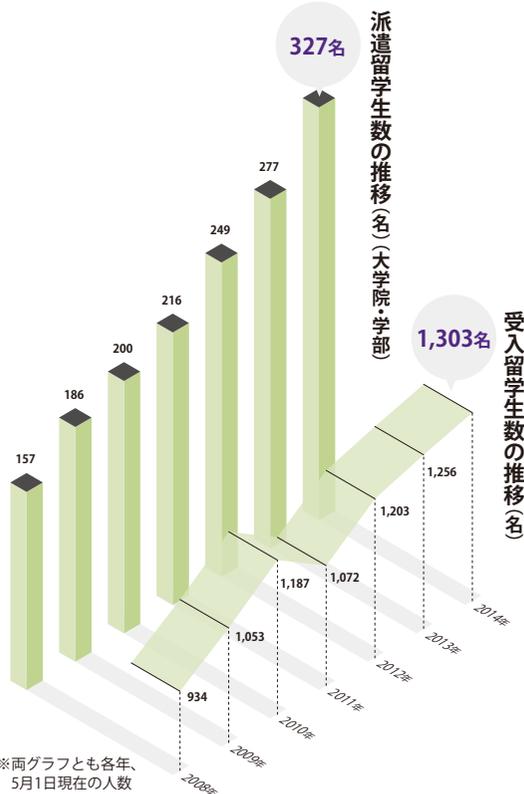


MORE GLOBAL 塾生の国際交流体験

慶應義塾の創立者・福澤諭吉は、3度にわたる欧米視察を敢行し、日本の近代化のために、欧米のシステムを導入した新しい教育の必要性を痛感しました。以来、国際性を指向する基本姿勢は慶應義塾の原点そのものであり、塾生にも積極的に国際交流を経験し、視野を広げてもらうべく、義塾は交換留学協定校の拡大やプログラムの充実を図っているところです。

左のグラフにあるとおり、慶應義塾大学からの海外派遣留学生数は着実に増えつつあります。また海外から義塾に留学する受入留学生数も増えており、留学生と交流することによって、日本にいながらにして国際交流を体験できる可能性も高まっています。

本号の特集では、いくつかある海外留学の手段のうち、慶應義塾大学派遣交換留学制度や国際センター主催の短期海外研修プログラムを紹介するとともに、交換留学を経験した塾生や、国内において積極的に国際交流を図った塾生の声もお届けします。



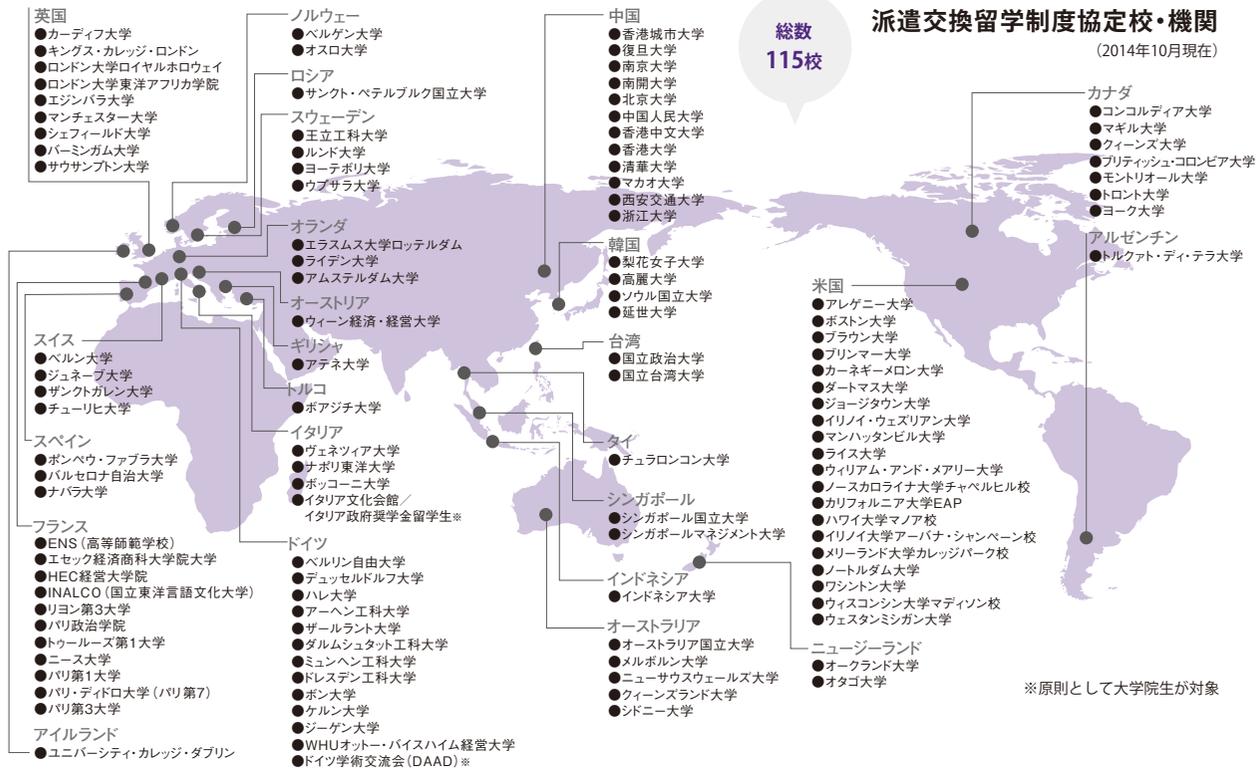
派遣交換留学制度と 短期海外研修プログラム

義塾には、外国の個々の大学との間で交わした協定に基づいて実施される交換留学制度があり、下記の世界各地にある協定校・機関で1学年間の留学生活を送る機会を提供しています。応募申請の手続きと選考を経て派遣生となった塾生は、留学中、義塾に学費を納入しますが、派遣先大学での学費は免除されます。

いきなり長期留学に行く決断をするのは難しい、語学力に不安がある……という場合は、夏休みや春休みを利用して、短期海外研修プログラムに参加してみるのもいいでしょう。下記の国際センター主催短期海外研修プログラム以外にも、各学部・研究科で独自に主催している国際交流プログラムもあります。

派遣交換留学制度協定校・機関

(2014年10月現在)



短期海外研修プログラム一覧

ノートルダム大学夏季講座	米国：インディアナ州サウスベンド、イリノイ州シカゴ
ウィリアム・アンド・メアリー大学夏季講座	米国：ウィリアムズバーグ、ワシントンDC
ワシントン大学夏季講座	米国：シアトル
ケンブリッジ大学ダウニング・コレッジ夏季講座	英国：ケンブリッジ
オックスフォード大学クライストチャーチ・コレッジ夏季講座	英国：オックスフォード
オックスフォード大学リンカーン・コレッジ夏季講座	英国：オックスフォード
パリ政治学院春季講座	フランス：パリ
延世大学春季講座	韓国：ソウル
シドニー大学春季講座	オーストラリア：シドニー

留学に関する詳細や応募方法などについては、国際センターのWebサイトを確認してください。また、本号 36 ページにも情報を掲載しています。

国際センター

URL <http://www.ic.keio.ac.jp/>

派遣交換留学
経験者座談会

留学で 自分を 再発見する



 UNITED KINGDOM
マンチェスター大学留学

法学部政治学科4年
こくほけんじ
國保賢治君

 UNITED STATES OF AMERICA
ダートマス大学留学

法学部政治学科4年
ふもと
麓 えり君

 SINGAPORE
シンガポール国立大学留学

経済学部3年
いいよしゆう
飯吉佑有君

それぞれイギリス、アメリカ、シンガポールの大学に派遣された3名に、留学の目的や勉強の内容、現地での暮らしについて、語り合ってもらいました。外国での勉強と生活は、楽しいことも、大変なこともいろいろあります。しかし、多くの外国人とふれあいながら学ぶ経験は、知識を深め、視野を広げるだけでなく、新しい自分を発見する機会でもあります。

異なる環境で 自分を見つめ直す

—— 交換留学に応募しようと思った理由から教えてください。

國保 野球ばかりやっていた高校時代、学校に講演に来た方から銃を持つ少年兵の話聞き、世界にはそんな境遇の人もいるのかと思ったのが、日本の外の社会に興味を持ったきっかけでした。法学部に入り国際政治を学びながら、海外の学生と交流する国際フォーラムでも活動し、外国への興味はさらに膨らみました。義塾で触れた国際政治は基本的にアメリカ流。そこで、以前から興味があったイギリスの視点から国際政治を勉強しようと、交換留学制度を利用してマンチェスター大学に留学しました。

麓 私の場合は、慣れ親しんだ日本もいいけれど、学生生活の一時期、外国の不慣れな状況に身を置いて、新しい自分を見つきたいという思いで留学しました。アメリカを選んだのは、さまざまな国籍、人種が交わる大国で暮らしてみたかったから。アメリカでは大学院に力を入れている大学が多いなか、学部教育が充実していたダートマス大学を留学先として選びました。



飯吉

2年生での留学だったので、私
はもう少し軽いノリでした。英語が好
きだった中学の頃に留学への憧れはあ
りましたが、高校での受験英語で、留
学熱は一度冷めていました。でも義塾
に入学し、日吉のラウンジで何げなく
「留学のてびき」をめぐるうちに、留
学への思いがよみがえったのです。私
の地元には中小企業が多く、その経営
に興味があり、それなら大企業志向の
アメリカ経営学よりアジアの方が面白
いかな、とシンガポール国立大に留学
しました。学生寮ではシンガポール人
4人、ベトナム人1人と同居。個室の
他にリビング、キッチン、お風呂が共
用。会話はすべて英語です。シンガポ
ール周辺には観光地が多いのですが、
現地の学生と同じペースで勉強しよう
と決め、観光はいずれ社会人になっ

からと思い、学間に注力しまし
た。とはいえ完全に勉強のみだ
ったわけではありません。寮対
抗のスポーツ大会に、高校時代
にやっていたバドミントンで出
場して優勝。みんなで大喜びし、
友情も深まりました。

國保

僕がいた寮のメンバー
は、イギリス人3人と中国人4

人。国籍も、育った環境も文化も異な
る学生たちとの共同生活ではなかな
しっくりいかないことも多かったの
ですが、これも留学ならではの経験でし
た。マンチェスター大学は、学生数約
4万人、そのうち約1万2000人は
世界154カ国からの留学生という国
際的な大学。ヨーロッパ、アジア、ア
ラブ各国からさまざまな人が集まっ
ています。そのような環境のなかで痛感
したのは、自分の存在を示すの
は国籍と名前だけということ。
日本では、慶應で国際政治を専
攻していますと言えどそれなり
に自分のことを理解してもらえ
ますが、海外では「日本人の國
保」という以外に、誰も認識し
てくれません。日本では学生団
体のメンバーとして国際フォー



ラムを立ち上げたりして、それなりに
自分に自信を持っていたのですが、そ
んなものはまったく通用しません。あ
る意味で鼻っ柱を折られたのですが、
折られてよかったと思います。この環
境の変化こそが留学の面白さで、自分
を見つめ直すいい機会になりました。

自ら行動を起こさないと

言葉と環境が違うだけ

麓 孤独感もありますが、自分を問
直し、自由に好きな勉強ができる環
境を享受できるのが、留学の醍醐味です。
私は国際政治学以外に、言語学、ネ
イティブアメリカン学を学び、視野が広
がりました。また、課外活動にも積極
的に取り組みました。ゴスペル合唱団
に入り地元の人たちの前で歌ったり、
テーブルシロップを作るサークルに参

加して、メープルの樹から樹液を採取するため、零下20度の寒さのなか山小屋に泊まり込んだりしました。地元の中高生にボランティアで授業を行い、生徒や学校の先生と知り合えたのもすてきな経験でした。一方、授業では苦しんだこともあります。予習として毎週20ページほどの論文を約10本読み込んで臨まなければならぬ授業があり、ついていけなくなりました。自分が後れを取っていることを認めざるを得なくなり、つい悔し涙がこぼれました。でも、先生に救いを求めると親切なアドバイスをくれました。また、クラスメイトに打ち明け、大変さを共有し、助け合うこともできました。くじけてはいけないと頑張っても、一人では解決できないこともあります。そんなときに、勇気を出して周囲に働きかけれ



ば道が開けてくるということを学んだのも、留学の成果のひとつだと思います。**飯吉** 経営学を学ぶつもりだったのに、ある先生の計量経済学の授業がすごく面白くて、経済学の数学的アプローチの魅力に目覚めました。留学したことで、経済学部生の本分に立ち返った、というところです。寮とキャンパスが近いため勉強に集中しやすく、日本とは違った環境でちよつと頑張ってみようかという気持ちになり、結果としていい成績をもらえたことで、やれ

ばできるんだと自信ができました。帰国後は計量経済学だけでなく、マイクロ、マクロなど、いろいろな分野に興味を持ち始め、新しい自分の将来像が見えてきました。

國保 留学は、学ぶ環境も人間関係も今

までにない経験だからこそ、新しいことに気づき、一皮むけた自分に出会えるいい機会になると思います。

麓 ただし、留学すれば何かが変わるという受け身の姿勢では、言葉と環境、つまり自分の後ろにある背景が変わるだけです。勉強でも課外活動でも、自分でやりたいことを選び、積極的に行動を起こすことが大切だと思います。

外国人交換留学生と塾生が交流する「慶應ともだちプログラム」がスタート



国際センター開設50周年記念事業の一環として、「慶應ともだちプログラム」(Keio Tomodachi Program (Buddy))が始まりました。このプログラムは、交換留学で義塾に留学中の外国人留学生と、国際センター主催のプログラムへの参加経験がある塾生各数名ずつがグループ (Buddy) をつくり、交流することを目的としています。

10月16日(木)には、日吉キャンパスにてプログラムのキックオフミーティングが開催されました。初めて顔を合わせた学生たちは、義塾にまつわるクイズなどを楽しみながら次第に打ち解けていきました。

今後は、各グループの自主性と計画に基づいて交流が進められます。留学生は塾生との交流を通じて日本の文化を体験するなど、義塾での留学生生活を充実させ、塾生は留学生とのコミュニケーションによって国際感覚を身につけることが期待されます。

義塾キャンパスでの塾生の国際交流体験

国際交流体験のチャンスは、海外に行くだけでなく、国内にもあります。以下、国際シンポジウム運営を経験した塾生や、授業を通じてできる国際交流体験をご紹介します。

アジア太平洋地域最大規模の国際学生会議を運営



法学部法律学科4年
もり森 けん吾 君

この度、「ハーバード大学アジア国際関係プロジェクト (Harvard Project for Asian and International Relations: 以下HPAIR)」を、2014年8月22日から26日の期間にて実施しました。HPAIRは、ハーバード大の関連団体が主催し、アジア太平洋地域を中心とする名門大学の学生500人と幅広い分野の専門家が一堂に会して同地域の諸問題を議論する国際シンポジウムです。そして今年度の東京会議では、慶應義塾大学ご協力のもと、三田キャンパスなどを会場として本会議を行い、楽天の三木谷氏など各界で活躍していらっしゃる方々にもご登壇いただきました。

私はこの会議の運営で主に招致を担当し、全面支援を得るために大学側に働きかけたり、ハーバード側の学生と、多い時は1週間に2〜3時間におよぶミーティングを行うなどして準備を進めてきました。参加した時に、日本の若者が優秀な世界の学生に囲まれて世界で戦っていけるのかという危機感を感じましたが、いかにこの会議を日本にとつて、東京にとつて意味のあるものにする事ができるかという気持ちで話し合いをまとめていきました。また、最初は数人しかいなかった運営メンバーを最終的に約30名まで増やした



インターナショナルナイト (文化交流会) の様子

り、会議が赤字にならないようにすることにも最大限努力しました。私はこの会議をきっかけに、現在の日本、そして慶應義塾を世界に発信し、そして世界の学生を日本に招致することにより、同世代の人たちが少しでも世界に触れ、刺激を受けて自分の世界を広げる機会となればと考え運営を行ってきました。その結果、多くの学生から、普段日本に在るだけでは味わうことのできない体験ができ、また、世界レベルにおいての自分の立ち位置を再確認できて、明日から頑張ろうと感じたという声を頂くことができました。こうした機会の実現のため、多大なるサポートを頂いた慶應義塾の関係者の皆様、ならびにメンター三田会の皆様など、開催までの約2年間ご協力を頂いた全ての方々に、改めて心より御礼申し上げます。



商学部 Global Passport Program (GPP)

英語での専門科目を通じ、理論と現実社会を学ぶ

海外留学での学びに近い
カリキュラムと授業環境

商学部の Global Passport Program

(以下 GPP) の授業は、すべて英語で行われます。多くの授業は海外から

の交換留学生を交えて行われており、1クラス約20名の少人数制で教員の多くは外国人、国内に居ながら海外の留学先での授業に近い環境です。GPPカリキュラムは3つの柱で構成されています。

① コースワーク：商学研究科と

の併設科目を中心に、経営、会計、商業など大学院入門レベルの専門性の高い授業。

② ワークショップ：クラスの中で

留学生を含む4名ほどでグループを作り、実践的な研究テーマを決めてプロジェクトを実行。留学生がいるため、授業中も、時間外の自主的なミーティングも必然的にすべて英語となります。毎週プレゼンテーションの時間が与えられ、期末には成果発表のプレゼンを行います。

③ アクティビティ：世界最先端

の企業経営者らを招いての英語での講義や討論、企業訪問



などキャンパス内外で積極的に活動します。3月に実施される海外研修もその一環です。

商学部生のみならず、全学部の3～4年生が対象。ただし参加希望者から学業成績とTOEICスコアで選考します。2学期間参加し、規定単位を取得した者には、GPPプログラム修了の認証が与えられます。

グローバル化した社会の中でリーダーとして飛躍できる人材の育成が、商学部GPPの目的となっています。

**留学生とのワークショップで
英語で伝える力が身につく**

GPPを受講した瀧澤茉莉嘉君（商学部4年）と熊澤昊君（シンガポール

国立大学からの元交換留学生)に、GPPの魅力とメリットを聞きました(熊君はスカイプで参加)。

——GPPに参加した理由は？

瀧澤 英語を使ってビジネスを学んだり、異文化交流を経験したかったため、昨年から国際センターの授業を履修していましたが、さらにレベルアップを目指して受講しました。

熊 貴重な日本での留学期間を充実させるためです。世界レベルの授業で経済、金融、人事制度が学べ、日本の学生と深く交流できることが魅力でした。

——授業で良かったのは？

瀧澤 ドイツ人留学生を含む4人グループでのワークショップ。「日本企業の人事制度をよくするには」というテーマを決め、アンケート作り、学生へのインタビュー、そして結論をプレゼンするまで、教室内外でのミーティングはすべて英語。ディスカッションを通して、英語で論理的に意見を伝える能力を身につけました。

熊 僕もワークショップで多くのことを得ました。テ



マを決めて、データや資料を集めて持ち寄り、ミーティングを重ね、毎週授業でプレゼン。自由に意見を出し合う雰囲気なのか、みんなから質問やアドバイスが活発に出され、充実したワークショップでした。

瀧澤 少人数クラスなので、授業外での交流もみんなで楽しみました。海外生活も留学もまだ経験がないのですが、いろいろな国の留学生と交流し、

さまざまな考え方や感じ方を肌で実感できたのも収穫でした。

熊 そう、授業外の交流も大切。最初は英語での会話に気後れした様子だった日本人学生も、飲み会などでリラックスして、授業でもよく発言するようになりました。僕も日本人の友人がたくさんできました。

▼GPPに参加するには？

学業成績とTOEICスコアを用いて行われる選考に応募し、合格しなければなりません。詳細は、以下のサイトでご確認ください。

URL <http://www.gakui.keio.ac.jp/mita/sho/gpp.html>

▼留学生と共に学ぶ国際センター講座

GPPと同様、留学生と共に学ぶことができる、すべて英語で行われる授業として、国際センター講座があります(ただし学部2年生以上が対象です)。

こちらは、経済・ビジネス関係の科目だけでなく、文学・言語・芸術・文化・異文化理解、歴史、政治・外交・交流など、多くの分野にわたった日本および東アジア・東南アジアに関する科目が開講されており、また、基本的に選考はありません。詳細は、以下のサイトをご確認ください。

URL <http://www.ic.keio.ac.jp/aboutic/aboutcourse/>